

ナチュラルキス **+**_{plus}

side Keishi

C o n t e n t s

ナチュラルキス_{plus} 5
～ side Keishi ～

陰謀は軽妙に 275

ナチュラルキス_{plus}

～ side Keishi ～

1 やる気のないカメラマン

駐車場に車を停めた佐原啓史は、腕時計で時間を確かめると、ポケットから煙草を取り出した。窓を開けて煙草に火をつけ、座席を少し倒してくつろぐ。煙草を特別うまいと思っているわけではなかった。習慣にはなっているが、それほど本数が多いわけでもない。ただ、時折……たまらなく吸いたくなるのだ。

特に、夕食のあととか……

家族はやめてほしいようだが、彼はやめるつもりはなかった。

一本吸い終えた啓史は、煙草を灰皿で揉み消し、車を降りた。工場の中に入り、顔見知りの従業員たちと、親しく挨拶を交わす。目指す場所は研究開発部だ。そこに啓史の籍がある。ここは啓史の父親が経営する工場。彼は大学に通う傍ら、暇を見つけてはここで研究を手伝っていた。

馴染みの部屋に入り挨拶をする啓史に、父が声をかける。

「よう。今日は早いな」

「水曜日の授業は、午前中だけだから」

「そうか。それじゃ、水曜日の午後は来られるんだね？」

研究開発部の部長が、嬉しそうに言葉を挟んできた。

「ええ。金曜日の午後も、三時くらいには来られると思います」

「良かった。夏休みが終わってしまったから、これからはあまりチームに入ってもらえないかと心配していたんだ」

「大丈夫です。授業の空き時間を、こちらの仕事に当てますから……」

啓史は自分の席に座り、パソコンを立ち上げながら言った。

「この間の問題点ですけど、解決策が見つかったんですよ」

「ほお、見せてくれ」

自分の周りに集まった皆に向けて、啓史はキーを叩きながら説明を始めた。

研究開発という仕事は、彼の意欲を掻き立てる。いまの彼の生きがいと言ってもいい。無から何かを創造することは楽しい。湧き出してくる問題点を取り除く、地道な作業すら彼は好きだった。そして、完成したときの満足感。だが、その満足はすぐに消え去り、彼はまた、次の創造に没頭する。人生とは螺旋のような線を描いているように啓史には思える。同じところを回っているわけではないのだが、同じところを回っているような錯覚に囚われる。

何か違う道が……螺旋の連続ではない人生が、あるのだろうか？

「お前、今度の週末、橘の家に行くのか？」

その問いに、専門誌を読んでいた啓史は、顔を上げて兄の徹を見た。

橘の家とは伯父夫妻の家のことだ。研究部の仕事が気になって、休日も工場に入り浸っていたから、ここ最近行っていない。伯父から、伯母も寂しがつているから、遊びに来いとしつこく誘われているところだった。

「まあ、行くかな」

持っていた専門誌を膝に下ろして徹に答え、啓史はコーヒを口に運んだ。啓史たち兄弟が住む家と、両親二人が住む家は、同じ敷地内に隣接して立っている。先ほど両親の家で夕食を食べ、こちらへと引き上げてきたところだ。居間には、兄の徹と啓史だけだ。三男の順平（じゅんぺい）は、いつも両親の家のほうにいて、この居間でくつろぐことはほとんどない。

慣れたことだが、甘みに胃が拒否反応を起こしている。母の料理は、啓史には甘すぎるのだ。もちろん、家族のために料理を作ってくれている母に、甘すぎるなどと文句は言えないし、言いたくもない。その代わり、煙草を吸って口直しをする。いまま煙草を吸いたいところなのだが、兄がいるので、煙草の代わりに濃い目のブラックコーヒーを飲んで甘味を紛らわせていた。

「土曜の午前中、お前、試合を観に来ないか？」

「試合？ それって、なんの？」

啓史は関心なく問い返しながら、また専門誌を取り上げた。

「もちろん、俺の教え子たちのさ。どいつも可愛いぞお。目がいいんだ。必死でボールに食らいついてくときの、キラキラした目がな」

キラキラしているのは徹の瞳だ。本人は気づいていないらしいが……

教え子というのは、中学校の生徒のことだ。中学校の教職について二年目の徹は、今年初めて担任としてクラスを受け持った。さらに、いま話に出たバレー部の監督兼コーチをしているというわけだ。だが、話を聞くに、勝ちひとつ収めたことのない弱小チームらしい。

四月から九月のいまに至るまで、何度教え子やら部活やらの話を聞かされたかわからない。順平ならばもともと熱心に話を聞いてくれるだろうに、どうしてこの兄は興味を見せない啓史相手に、語りたがるのだろうか？

「なあ、来るだろ？ あいつらの活躍を写真に収めてほしいんだ」

「ああ？」

雑誌の内容を脳にインプットしていた啓史は、徹の言葉を聞き逃し、問い返しの意味で声を発した。「そうか。よしよし、それじゃデジカメ持つてくるわ」

「は？ デジカメ？」

膝をパンパンと叩きながら、徹はいそいそと立ち上がり、部屋を出てゆく。

「あ……ちよつと……」

待てよ、と言う前に、ドアは閉じていた。

なんで、こんなところにいるんだ、俺は？

体育館の隅に立ち、啓史は自分に対して、呆れたように問いかけた。

土曜日の午前中だ。徹から預かった……いや、押し付けられたデジカメは、ポケットの中にある。

なんで、俺がこんなこと……

そうは思うものの、引き受けてしまったものは仕方がない。

啓史は、初めて訪れた中学校の体育館を見回した。徹はいま、試合前の生徒たちと、なにやらミーティングらしきものをやっている最中のようなのだ。あの輪の中に入れられて、徹の弟だのなんだの与自己紹介などやらされたくない。彼は兄の視界から消えることにした。とにかく彼の役目は、このデジカメに、徹の教え子たちの活躍を写すことなのだ。

二階席から眺める館内の光景は、かなりいいものだった。

跳ね上がるボール。床に打ちつけられたボールの爽快な音……独特の匂い……。どれも懐かしかった。

徹が率いる、清涼感のある青いユニフォームを着たチームは、見るからに貧弱だった。他の学校の選手たちは背が高く体格もいい。それに比べると、どうしても見劣りする。

それでも、プレーでは引けをとっていなかった。

弱小チームだという話だったのに……

写真を撮ってさつさと退散しようと考えていた啓史は、いつの間にか試合の様子に胸を躍らせていた。スパイクが決まると、小さいながら思わずガッツポーズをし、声を上げる。俄然、写真を撮るのが楽しくなってきた。

確かに、徹の言ったとおり、彼らには魅力があった。相手チームに向ける強い闘志が伝わってくる。

一セット目は負けたが、彼らは二セット目を勝ち取った。

輝きを放ちながら、生徒たちが徹を囲む。彼らの頭を、ひとりひとり小突くように叩いている徹に、強い羨望が湧いた。あれほど慕われて……どんな気持ちがあるものだろうか？

そのとき、啓史は輪の中に、ひとりずば抜けて背の低い生徒がいることに気づいた。

あんなやついたか？

啓史はデジカメを、そのちびすけに向け、シャッターを切った。

徹がちびすけに何か言う。そいつはこくりと頷くと、回れ右をして荷物に駆け寄っていった。

女……？

どうやら、選手ではなかったらしい。同じユニフォームを着ているから、てつきり……

だが、そのちびな女の子の笑顔は、ひとをひきつける何かがあった。啓史は、大きなバッグに両手をつっ込み、真剣な眼差しで何かを探している少女の姿を、笑みを浮かべながら写真に収めた。

2 チビな少女

「よく撮れてるじゃないか。正直あんまり期待してなかったんだが」

自分から写真を撮れと無理強いておきながらそんなことを言う徹を、啓史は横目で見つめた。

「どうして？」

そっけなく啓史は聞いた。

「デジカメ渡したときの、お前のやる気のなさは明らかだったからな」

啓史は、思わずくつくつと笑った。

「まあ、いい試合だったよ」

一回戦を勝ち抜いたのだ。二回戦は惜しいところで負けてしまったが……

「あいつらどんだんうまくなってくんだ」

「兄貴の育て方がいいんだろ」

徹が目を見張った。嬉しげだ。

「なんだよ？」

「いや、いつも興味なさそうだったのに……と思つてな。お前、何を熱心に見てんだ？」

徹は啓史の手から写真を取り上げた。

「なんだ？ エノチビか」

「エノチビ？」

「ああ。榎原沙帆子。チビだからエノチビ」

啓史はぶつと吹いた。チビなあの子のあだ名には、びつたりだと思えた。

「こんなだが、こいつは芯があるぞ」

「ふうん」

そう相槌を打った啓史は、また吹き出した。こんなだがという表現がおかしかったのだ。

「小学生から、ミリ単位の成長もしてませんって感じだな」

「ああ、他のやつらと比べると幼い感じがするな。けど、本人は自覚してないが、人気者だぞ」

「へえ、キャラクターがそんなに面白いのか？」

「そうじゃない。性格がいいんだ。これはもう、なんていうのか……天性の純粹さっていうのかな」

「ふうん」

啓史はテーブルに広げられている写真の中から、また別のちびすけが写っている写真を一枚取り上げた。真面目な顔でスポーツバッグを漁っている。華奢な体型、なんとも儂げに見える横顔……保護欲が湧く。こんな妹がいたら、可愛がってやったかもしれない。

母は、きつと、こんな娘が欲しかったことだろう。

「六月に、遅刻撲滅作戦てのがあったんだ」

だしぬけに、徹がしみじみと語り始めた。

「撲滅作戦？」

「ああ。遅刻しないようにしようって、生徒会が発案して、一ヶ月間、クラス同士で競い合ってたんだ」

「それはそれは」

「俺のクラス、無遅刻で最後のほうまで残つてな」

「良かったじゃないか。賞をもらったのか？」

「いや。最後の最後に遅刻したのがひとりいて……駄目になった」

「やっちまったって感じたな。そりゃあ、クラスメイトから責め……」

啓史は言葉を止めた。

話の流れからして、その生徒とは……

「まさか、このちびすけか？」

「当たり前」

「どうなった？」

急に不安になり、啓史は徹に詰め寄るように尋ねた。どういふことになったのか、気になつてならない。

「そりゃあもう、クラス中から非難轟々、ひなんどうどうこのときは俺も参つた。エノチビはいくら聞いても頑なに理由を言わないし……」

「それで？」

「一週間そのままだった。一週間経つた日の午後、学校にある親子が来たんだ」

「もったいぶらずにざつざつと見えよ。気になるだろ」

「つまりだな……子どもは小学校の一年坊主だったんだが、登校中にぬかるみで足を滑らせて尻もちをついたんだ。その尻もちをついた場所が運の悪いことに、前日の雨でできた水溜りだった」

「それが？」

「まあ聞けよ。つまり、見事にズボンの尻だけ濡らした。見たところ、お漏らし状態つてわけだ。このまま学校に行ったらからかわれるだろうから、行きたくない。けど、すでに母親は仕事に出かけ

てしまい、家にはもう誰もいない。パニックになつて泣き出した彼のところに、天使は舞い降りた」
その天使とは、もちろんちびすけのことなのだろう。

「それで？」

「チビ天使は、自分の立場がどうあろうと、見捨てようなんて思いもしない。助けたさ。家までついていってやって、彼が持たされた鍵を使って家に入り、泥を落としてやって服の着替えを手伝い、自分を頼りきつて握り締めてくる小っちゃな手を振り切れず、小学校まで手を繋いで送つてやった。で、自分は……」

「遅刻か」

「ああ」

「なんで遅刻の理由を言わなかったんだ？」

「遅刻したことに変わりはないからって言っていたが……助けたそいつと約束でもしたんじゃないかなと俺は思つてる。けして誰にも言わないってね」

無性に憤りが湧いた。腹立ちは出口を見つけれず、胸の中でさらに膨らんでゆく。

「親に言ったのは、一週間も経つて？ やつとか」

「なにかの拍子に、口を滑らせたらしい。親は話を聞き出して、礼に来てくれたわけだ」

「それで、みんなの怒りは解けたのか？」

「みんないいやつらなんだが……」

徹は困り顔でため息をついた。

「あのときは、優勝目前で、クラス中が異様な熱気に包まれていたからな。エノチビに対する態度はひどいもんだった。一週間経って、エノチビの遅刻の理由が明らかになって……なんともいえないムードになったな」

徹は苦い思い出を噛み締めるように、口を閉じ、天井を見上げた。

「事情を知って恥じ入ったクラス全員に、エノチビはいたたまれなかったみたいで……泣き出した。……責められてるときは、顔を強張こわばらせたまま、けして泣かなかったのに……。ごめんなさいごめんなさいって、ずっと繰り返すんだ」

「それで？」

「まあ、あとは時間が解決ってやつだったな」

「そうか」

胸の痛みが少し引いたが、消えたわけではなかった。

「校長が、良いことをした生徒に贈る、輝き賞つてのがあるんだが、エノチビはいらなくて、頑かたなに拒否したよ」

啓史は天井を見上げたままの兄を見つめながら、手にしていた写真を専門誌の間に滑り込ませた。

「だろうな」

淡々と口にした啓史に、徹が顔を向け、にやつと笑う。

「教師ってやつは、体験する価値があるぜ」

「かもしれないな」

彼は専門誌を開いて、目を落とした。

写真の中にいるちびな少女の、幼さと強さが微妙なバランスで調和している美しい横顔……
自分が負けてる気がした……

3 当たり前の事実

啓史は混んだ駐車場に、なんとか空きを見つけ駐車した。車を降り、ゆっくりと周りを見回す。歓声のような声が遠くから聞こえ、啓史はそちらに顔を向けた。

徹が勤めている中学校だ。九月の試合に、カメラマンモドキとして来て以来、二ヶ月ぶりになる。今日は文化祭だ。演劇や楽器の演奏などの催し物を体育館でやっているはず。

ちびすけはいるだろうか？ 少しは、成長しただろうか？

徹から掠めとった写真のちびすけの横顔を思い出しながら、啓史は微かに笑みを浮かべた。

ポケットにある、購入したばかりのデジカメの存在を確認すると、体育館に向かう。

徹のクラスは、午後、楽器の演奏付きで、コーラスを披露するはずだ。

ちびすけはいつたい何を担当するのだろうか？ 楽器？ それともコーラス？

徹から話を聞いて、そんなことを考えていたら、この目で見たくてたまらなくなってしまうた。

あの小さな身体で……ちびすけは、何をするのだろうか？

啓史は、自分がいつの間にか緩みきった顔をしているのに気づき、慌てて表情を改めた。そして、周りの誰も気にとめていないのがわかっていながら、誤魔化すように咳をする。

体育館の中は、ぎつしりとひとで埋まっていた。薄暗さにほっとする。今日ここにやってきたことを、徹には絶対に気づかれたくない。

席には着かず、啓史は光の届かない後ろの壁にもたれて舞台を見ることにした。コミカルに走りすぎて、失笑を買ってしまうような劇が上演中だった。啓史は入り口でもらったプログラムを確かめてみた。徹のクラスは次の次のようだ。退屈な二十分を過ごしたあと、緞帳とんちんかんが下りた。

放送が入った。徹のクラス名、演目、曲名の紹介。緞帳がゆっくりと上がってゆく。

啓史は素早く視線を走らせて、二ヶ月ぶりのちびすけを探していた。

コーラスの一員だ。

コーラスは五人ほどだった。ピアノに木琴、フルートやギター、ピアノカ、リコーダーなど、いろんな楽器での演奏が始まった。徹と生徒たちの頑張りなのだろうか、啓史の耳にはずいぶんとうまく聞こえた。なにより、ちびすけの担当しているコーラスがいい。

笑みを浮かべてちびすけを含めた全員の写真を撮っていた啓史は、顔をしかめてデジカメを下ろした。ちびすけの声がどれだかわからない。もちろんそれは当然のことだ。啓史はちびすけの声を知らないのだから……。それでも、ちびすけの声を耳で拾えないことが、ひどくもどかしかった。

真剣な表情で、指揮棒を注視しながら、歌い続けているちびすけ……

少し……成長したかもな……

いま……お前はしあわせか？

そう問いかけた彼は、身体を起こした。

拍手が鳴り響き、ちびすけの顔が達成感を含んだ、輝くような笑顔に変わった。

彼の気遣いなど、ちびすけには必要なさそうだった。

当然か……

ちびすけは、クラスメイトたちと喜びをわかち合っている。

ちびすけは啓史を知らない……

当たり前の事実が、いまになって胸に去来した。

彼はふっと息を吐くと、小さく肩を竦めて出口へと向かった。

4 友の苦いお節介

「佐原、佐原」

大学の研究室に入ってきた深野ふかのは、啓史の姿を見つけると、興奮したような笑顔を浮かべ、彼の名を繰り返しながら側に寄ってきた。

「なんだ？」

「いくつもらった？」

「なにを？」

なんのことだかすぐに気づいたが、啓史はそう答えた。

「決まってるんだろお。今日は何の日だよお」

「二月十四日」

「わかってんじゃない。で、お前、いったいいくつもらった？ 百か二百か？」

啓史は呆れた顔で深野を見つめた。

深野は、わははと楽しげに笑い出し、次いで笑いをやにや笑いに変えた。

「さすがのお前でも、二百はないよな。そいで？ 実際はいくつもらった？」

背後から顔をくつつけるようにして、深野は啓史の肩に手をかける。

「もらってない」

啓史はそっけなく言うと、コンピュータのディスプレイに視線と思考を戻した。

「またまたあ。なんで隠すんだよお」

「隠してない」

啓史は肩に置かれた深野の手を、邪険に払った。

「まあいいか」

ケケケと気味の悪い笑い声を上げると、深野は自分の机の前に行き、椅子ではなく机に腰を据えて足をぶらぶらさせ始めた。時計を見て、ドアを見て、またにやにやする。まるで何かを待っている

るような仕草だ。

「彼女とここで待ち合わせか？」

「へっ？ 知ってるのか？」

「知るか。お前がドアを気にしてるから、お前の彼女がここに来るのかと思っただけだ」

きつと、チョコを持ってくるのを待っているのだろう。

「あいつとは、夕方待ち合わせ」

啓史は深野を見つめ、「そうか」と一応答えた。なら誰を待っているのだろうか疑問に思ったが、追及するほどの興味もなく、彼はまたディスプレイを注視してキーを叩き始めた。

「なあ、お前、どんなのが好みだ？」

「なんのことだ」

「女の好みに決まってるんだろ」

啓史は忙しく動かしていた手を止め、ちらりと深野を見た。脳裏に、ここに来る途中で会った、やたら化粧をほどこし、甘ったるい匂いを発していた女子学生が蘇る。チョコを差し出されてきっぱりと断ったら、逆切れた挙句、捨て台詞を吐いて去っていった。

「化粧つけない女」

「はは〜ん」

深野は納得したような声を出すと、手帳でも持っているようなふりをして、そこに書き込むジェスチャーをする。

「で、性格は？」

馬鹿馬鹿しいと思いつつ、啓史は流れて答えた。

「逆切れしないやつ」

「へ？」

深野は眉を寄せたものの、何を思ったのか、「ははん」と再び納得したような声を出した。

「つまり、清楚で可憐な子ってことだよな？」

確認するように言われ、啓史は画面を見つめたまま考え込んだ。

確かに、清楚で可憐なほうがいい。

「そうだな」

手帳に挟み込んでいるちびすけの写真を思い出しながら、啓史は答えた。

恋の対象にするには幼すぎるが、ちびすけの純真さと華奢さは、清楚で可憐と言い換えられるだろう。

「なんだあ。佐原、お前、なに、思い出し笑いしてんだよ」

立ち上がった深野が、啓史の背後からタックルするように抱きついてきた。そして、頭を小突く真似をする。

「やめろって」

そのときノックの音がした。外部の者だ。この研究室の輩は誰ひとり、ノックなどという礼儀は持ち合わせていない。

「およっ……き、来た。来た来た……」

まだ啓史の背中に張りついてた深野は、唇を彼の耳にくつつけんばかりにして、なぜか小声で叫ぶ。気色悪さに鳥肌が立ち、啓史は深野の頭のとっぺんを叩いた。

叩かれたことなど気にもとめず、深野は軽い足取りでドアに向かう。やってきたのは、やはり深野の待ち人らしい。

深野は、ドアの外にいったん出て、そのまま話を始めた。わずかに開いたままのドアから、こそこそとした話し声が耳に届く。相手は女性のようだった。数分してドアが大きく開く音がし、啓史は顔を向けた。

見たことのある女子学生がいた。

彼は顔をしかめた。彼女はラッピングされた四角い箱を抱えている。頬を桃色に染め、ひどく恥ずかしそうな顔をしていた。

深野、あの大馬鹿野郎！

深野を心の中で罵りながら、啓史は腕を組んだ。

「あ、あの。佐原さん、こんにちは」

「どうも」

これから起きるだろう決定的な事態を回避するために、できることならば、この五階の窓から飛び降りたいくらいだった。

「これ、あの、も、もらって……いただけませんか？」

「いらない」

おずおずと口にされた言葉にたいして、啓史はそっけなく答えた。

深野が張り付いているのだろう、ドアが動揺したように揺れた。

啓史に向けて箱を差し出していた彼女は、ショックを受けたような顔で数秒固まり、ギクシヤクとした動きで腕を下ろした。拒否されるとは、思いもしていなかったらしい。そのぶん、衝撃が大きかったのだろう。

「あ、あ、……」

顔が真っ青だ。苦いものが胸に湧く。

彼女はさつと身を翻し、すごい勢いで部屋から飛び出していった。

彼女の名を呼ぶ深野の声が廊下で響いたかと思うと、すぐに血相を変えた深野が飛び込んできた。

「お前……なんて……なんて……」

深野は怒りに満ちた顔で啓史を睨みつけてきた。

「いまのはひどすぎるぞ。あれが誰だかわかってんのか？ ミス百合だぞ。断るんでも、もうちよつとうまいこと断れるだろ？」

「どんな風に？」

啓史は深野をじっと見つめながら聞いた。腹を立てているのは、深野だけではない。

「ど、どんなってだな。つまり、もつとソフトに……」

「ソフトに？ なんて言って断れば良かったってんだ？」

深野が口ごもった。

啓史だって、けして平気で口にしたわけではない。断る彼が胸を痛めていることなど、深野にはわからないだろう。だが、はつきりと言わなければ、誤解を生む。

相手を傷つけないようにやりわり断ろうとして失敗し、これまで幾度も苦い経験をしている。

「だって……ミス百合だぞ。あの子以上に清楚で可憐な子なんていねえだろ。なんの文句があるってんだ？」

「文句なんてない。だが、俺は彼女に対して特別な感情を持ってない」

深野は口を閉じ、自分の椅子にぐったりと座り込んだ。

「俺が全面的に悪かったよ。佐原、すまん」

深野に頭を下げられて、啓史は「いや」と首を横に振った。

反省している様子に、これ以上責められもしない。

「勇み足だった。ミス百合に、いつだったらお前に会えるかって聞かれてさ……それでまあ、……君なら絶対大丈夫だって、言っちゃって……」

深野はひどく悔いの混じった息を吐いた。

「悪いことしちゃった……」

そしてまた、盛大にため息をつく。

ため息をつきたいのは、正直、啓史のほうだった。

自分の部屋のベッドに転がっていた啓史は、ノックの音に「なに？」と返事をした。この独特の叩き方は、兄の徹に違いない。

「出てこいよ。コーヒー淹れてやったぞ」

押し付けがましいが、ずいぶんと楽しそうな声だった。よほど嬉しいことがあったらしい。

ミス白百合の一件で、嫌な気分を抱えていた啓史だが、兄の言葉に素直に従うことにした。徹の話はたいがい面白いし、いい気分転換になるかもしれない。

コーヒーの香りが漂っている居間に一歩踏み込んだ啓史は、そこで足を止めた。

「どうした？ 座れよ」

テーブルの上に、バレンタインチョコらしき包みが、十個ほど転がっていた。

「ずいぶんもらったな？ 中学校の教師ってやつは、そんなにもてるのか？」

「まあな、可愛い教え子たちに愛されてるからな、俺は」

「教え子？ 教師が生徒にこんなものもらっていいのか？」

「教頭みたいなうるさいこと言うな」

「教頭に言われたのか？」

「見つけたら没収しろって言いやがったが、俺はたとえ中坊でも、ひとの恋路を邪魔するような野暮な野郎じゃないんだ」

「中坊でも、チョコを渡したりするのか？」

「するに決まってるんだろ」

徹が身を乗り出してきた。

「俺のクラスでも、カップルの誕生だ」

「ふーん」

そっけない返事をしたものの、心が揺れた。

ちびすけは？ まさか、そのカップルの……？

「まだ早いだろ。中学生だぞ」

保護者めいた、むっとした思いが湧き、思わずそう口走っていた。

「中坊でも本気の恋をするさ」

「間違いがあつたらどうするんだ？」

あのちびすけは、まだまだガキんちよだ。そんな未熟なやつが、野郎なんぞにいいように扱われたらどうするのだ。

「啓史、お前、なにムキになってんだ？」

啓史は徹の言葉に我に返った。熱くなった頭を冷やし、ムカいている胸をなだめる。

「別に」

ぶつきら棒に返事をした彼は、テーブルの上に置いてある包みを見つめた。

「これ、受け持ちのクラスの子にもらったのか？」

「正直言うと、野郎からってのもある」

「はあ？」

「でも、女子からのほうが多いんだぞ。これとこれ以外は女子からもらったもんだ。あとこっちは、女性教諭たちからの義理チョコ。お返しはいらないうつてのだけもらってきた」

「たいしたもんだな」

「まあな。本気だとわかるやつは、中坊であろうとももらえないからな。そこんとこの見極めが大事だ」

「ちゃんと考えてるってわけだ」

「もちろんだ。それでこいつだが、啓史、こいつは値打ちもののチョコだぞ」

「それが？」

「こいつはな、エノチビがくれたんだ」

啓史は、徹が手のひらに載せた、ピンクのリボンが飾られた赤いビニールの袋をじっと見つめた。たいして豪華じゃない、むしろ簡素とっていいくらいこの包み。

「喉から手が出るほど欲しがってるやつらの前でもらうのは、ずいぶんと気分が良かったぞ」

そのときのことを思い出しているらしく、徹はくすくす笑い出す。

「エノチビがいなくなったら、あいつら欲しがってな。全員に一粒ずつ食べさせてくれって言い出しやがった。やらなかったけどな」

愉快そうに笑いながら、徹はその袋をぼんぼんと手のひらの上で弾ませると、テーブルの上でころんと転がした。

啓史はコーヒーを飲み干し、徹に顔を向けて口を開いた。

「これ、どうすんだ？」

「いつもお袋にあげてる。大事に食べてくれるからな。こいつらも喜ぶ」

「ふーん」

カップを手に立ち上がり、啓史はキッチンに向かった。

カップを洗う彼の脳裏に、ステージで歌を歌っていたちびすけの姿が浮かんだ。

あれは……もう三ヶ月前のことになるのか？ 少しくらいは、背が伸びてりゃいいかと、他人事ながら気にかかる。あのまま大人になったのでは、不憫で仕方ない。

啓史はキッチンから、居間の方向へ目を向けた。

ちびすけは、徹以外の男にもチョコをあげたりしたのだろうか？

あんなちびすけでも、好きな相手がいるのだろうか？

啓史は眉を寄せた。ろくでもない野郎を好きになつてなきやいいが……

心に小さな影がさした。彼はその影を追い払う。

見た目、子どもっぽいチビなのだ。チョコをあげたとしても、相手にされないに違いない。

あんなちびすけに、色恋などまだまだ早い。

「小学生並みだからな」

啓史は知らぬ間に声に出していた。そして、その眩きに納得して頷いた。

自室でパソコンを見つめていた啓史は、肩のあたりと眼球に強い疲労を感じ、椅子の背にもたれた。目を閉じ、右手で瞼を軽く揉む。少し楽になった目で、彼はディスプレイを見つめ直した。

この問題点、考えようによってはなんとかなる気がするのだが……

彼は頰杖をつき、キーを一つ二つと押すと、とりあえず考えるのをやめて立ち上がった。

父に相談してみるところ。話す途中で、立ちほだかっている壁を崩す、なんらかのヒントが得られるかもしれない。プリンターから出てきた用紙を掴むと、啓史は部屋を出た。

両親の家の居間を覗くと、母親がいつもの約束事のように、ソファに座って針を動かしていた。手芸の好きな母は、いつも何かしら作っているのだが、いまは刺し子というものに嵌まっているらしい。

「あら、珍しいわね」

「父さんは、まだ？」

「ええ。もう少し遅くなるんじゃないかしら。どうしたの？ 何かあった？」

「いや、いないならいい」

自分の部屋へ戻ろうとした啓史は、母親の側に置かれたカラフルな箱の山を見つめた。

徹の言葉どおり、チョコレートはすべて母親に贈呈されたらしい。

「啓史さん、チョコが欲しいの？」

ほんのり笑みを浮かべている母親の目を、啓史は無表情で見返した。

「好きな持っていいわよ」

その言葉に啓史は無意識に動いていた。気づいたときには、彼の手はチョコの山へと伸びていた。

「ひとつ、もらって……かな」

啓史ははっきりしない口調でそう言い、なぜか手にしてしまったチョコを、正気の部分でもあましながら部屋を出た。母屋と両親の家とを繋ぐ通路まで来て、彼は立ち止まった。そして自分が手にしている赤いビニール袋にピンクのリボンがついた物体を、不思議な気持ちで見つめた。

何やってんだ、俺……？

彼は自分の精神を疑った。

6 憂いの理由と望みすぎな依頼

「あん」

扉を叩いた返事として返ってきたのは、やたら気の抜けた声だった。

ドアを開けて中を窺うと、徹はベッドに大の字になって転がっていた。何か用事かと尋ねてくることもない。徹が落ち込んでいるという母の情報は、母ならではの過剰な心配だろうと思っただけだ。だが……どうやら……

「なんかあったのか？」

啓史の問いに、徹は身動きもせず、ただ「なんで？」と聞いてきた。

「居間に出てこないし……悩みがあるように見えるけど」

「なあ、啓史」

「うん？」

「教師なんてなるもんじゃないぞ」

啓史は本気で不安になった。

「なんで？ 教師ってのはいいもんだって、俺に切々と語ってたくせに……」

徹は何も言わず、天井を見つめている。啓史は徹の机に歩み寄り、椅子を引き寄せて座り込んだ。「一年間……親みたいな気分であいつらを見守ってきた。でも……もうすぐ卒業してっちゃう。高校じゃ、また新しい担任ができて、俺の存在なんか、どんどん薄れてくってわけだ」

啓史はほっとした。どうやら、徹の元気のなさは、単に教え子たちが卒業してしまうことの寂しさだったらしい。徹のいまの言葉は、確かに真実でもあるだろう……だが……

「それでもないだろ」

徹は寝転がったまま首を横に振り、重い息を吐いた。

「それが当然なんだし、そうでなきゃ困る」

「そこまで言うと、徹は啓史に目を向けてきた。」

「中学んときは良かったなんて、過去ばかり懐かしんで生きられちゃ、困るからな」

啓史は頷いた。徹はもちろんわかっているのだ。だが、それでも、教え子を見送らなければならぬ現実が切ないのだろう。

「俺は、兄貴の話を聞いて、教師ってのが羨ましくなっただけ……」

起き上がった徹は、あぐらをかいて両手を後ろにつくと、疑わしげな笑みを彼に向けてきた。

「そうか？」

「ああ。兄貴みたいに、生徒たちから慕われるってのは、いいもんだろうと思った」

「確かに……そのとおりだ」

「それに、生徒たちだって兄貴と同じ思いなんじゃないのか？」

「うん？」

「自分たちが卒業すれば、先生はまた新しい生徒の担任になる。自分たちの存在なんか、先生の中でどんどん薄まってゆくんだらうってな……」

「まあな」

これ以上かけられる言葉はなかった。いまの徹は、この切なさを抱えるしかないのだ。それは徹本人もわかっている。時が過ぎて、兄の心を落ち着かせてくれるまで……

「まだ、受験を控えてるやつがほとんどだしな。それも気にかかってならない」

「そうか……」

「高校受験か……」

啓史は眉をひそめた。「そういえば……あのちびすけも、中学を卒業するひとりなのだ。」

ちびすけは、いつまでも中学生でいるような気がしていた。

あのちびすけ……高校生になるのか……いや、マジでなれんのか？

高校の制服が大きすぎて、ぶかぶかで情けない顔をしているちびすけの無様な姿が、ありありと浮かび、啓史は軽く吹き出した。

「なんだ？ 何がおかしい？」

「い、いや。なんでも」

啓史はなかなか消えない想像に頬をひくつかせながらも、なんとか笑いを抑え込んだ。

「なあ、兄貴のクラス、やたらチビなのがいたる？」

「あ、うん？ チビと言われると、ひとりしか思い浮かばないが……」

「そいつに間違いないな。どこを受験するんだ？ あんなチビでも受け入れ先あんのか？」

「チビチビ言うな。エノチビが可哀想だぞ」

啓史は笑った。

「自分もチビって呼んでんじやないか」

「俺のはニックネームだ。愛情がこもってる」

「それで？ ちびすけはどこを受験するんだ？」

「あいつの高校は、もう決まってる」

「そうなのか？」

「ああ、伯父貴のとこだ」

啓史は眉を上げた。橘の伯父が経営する私立の高校は、とても人気がある。受験生は毎年かなりの数に上り、当然落ちるやつも多い。

「ちびすけ、受かったのか、すごいじゃないか」

伯父は啓史たち兄弟にも通ってもらいたかったようだが、徹は公立の進学校に、啓史と順平は工業高校に進み、三人とも伯父の高校には行かなかった。

「おめでどうって伝えといてくれ。制服のサイズ、合うのがあることを祈ってるって」
徹が吹き出した。

「あいつは確かにチビだが、そこまでじゃないぞ」

「そうか？」

啓史はかなりの疑いを込めて徹を見返した。

「まあ、サイズは直してくれるさ。もうすでに、部屋にぶら下がってるのかもしれないな」
徹の瞳に寂しさが滲む。また卒業のことが頭に浮かんだのだろう。

「なあ、啓史。お前、来週の火曜日は暇か？」

「なんで？」

「俺は担任だからな。生徒だけじゃなく、保護者の相手もしなきゃならないだろうし、あいつらの写真なんか撮っていられないと思うんだ」

「はあ。また即席カメラマンになれと言うのか。」

「火曜か……」

大学の研究室に行く日なのだが……

「頼む」

啓史の迷いに気づいたのだろう、徹は両手を合わせて頼んできた。まあ、いいか。

「何時？」

徹の顔がパツと明るくなった。

「式は十時からだ。保護者に紛れて保護者席に座ればいい」

「ちょっと待てよ。式？ 式にまで参加しろってのか？ そいつは断るぞ」

「小一時間で終わるって。式の最後に、ステージのところに勢ぞろいして、卒業生全員で歌うんだ」

「全員じゃあ、どこに兄貴のクラスの子がいるのか、俺にはわからない」

「俺のクラスは中央に固まっている。そのあたりを撮ってくれたら全員写真に収まるはずだ」

「その合唱の写真を撮れば、もう帰っていいわけか？」

「もちろんそのあとは、校門のあたりで頼む。みんな別れを惜しんでそこらでたむろするはずだから」

啓史は面倒な役割に、眉間に皺しわを寄せた。

「それでも撮れってのか？」

「俺にとっちゃ、一生に一度しかない、初めての教え子の卒業式なんだ」

「やってらんねえ」

啓史は立ち上がった。

これ以上ここにいたら、どんどんカメラマンとしての仕事が多くなりそうだ。

「啓史、頼んだぞ」

「気が向いたらな」

つれなく言って、啓史はドアノブを掴んだ。

「啓史」

呼びかけに、啓史は嫌々振り返った。徹も立ち上がっている。

「なんだよ？」

「デジカメ、忘れないうちに渡しとく」

「ああ……デジカメなら自前があるさ」

そういえばあのデジカメ、文化祭で使って以来、そのまま……

「おつ、なんだ買ったのか？ それなら良かった。できれば俺も持つときたいからな。しっかり充電しといてくれよ。それと、メモリの中身を空にしとくのも忘れないようにな。そしたら百枚は撮れるよな？」

百枚！

「馬鹿言ってるー！」

啓史は吐き捨て、徹の部屋から出た。

「ありがとな」

ドアを閉じる直前、徹の感謝の声が耳に届いた。

徹はいまの言葉で、約束を強固なものにしたつもりなのだろう。

「まったく……」

啓史は眉をひそめながら呟き、デジカメをどこにしまい込んだか思い出そうとした。

あのとき、自分はなんで中学の文化祭なんぞに、のこのこ出かけていったのだろう。徹に頼まれたわけでもないのに……わざわざデジカメまで買い込んで……馬鹿か……

パソコンの画面に映し出された画像を見つめ、啓史は顔をしかめた。舞台の上にいる徹の教え子たち。体育館の一番後ろから写したものだから、豆粒程度にしか写っていない。そんな画像の中央にいるのは、ちびすけだ。それは、啓史がちびすけを意識して撮ったから。

こんな画像……

啓史はフォルダごとゴミ箱に放り込もうとし、すんでのところで手を止めた。捨て去ることにためらいが湧く。啓史はそんな自分に苛立ち、パソコンの電源を落とした。

7 心の揺れ

クローゼットを開けた啓史は、ぶら下がっている服の中からスーツを取り出した。

なんで行くなんて言ったんだ？ それもこんなもの着ていかなきゃならないんだぞ？

自分に向けて啓史は問い質し、さらに文句を付け足した。

スーツに着替えながら、ため息をつく。徹から、卒業式にはスーツで来いと言われた。その方が父兄や教師に紛れて目立たないからと……。確かにそうかもしれないと納得はしたが、普段着ることのないスーツを着て外出することに、抵抗を感じる。

ワイシャツは白いものを持っていなかったので、徹から借りた。ネクタイは地味なものがいいというので、紺の無地だ。細身のスーツをかつちりと着込んだところで、啓史は諦めることにした。

どのみち今日で最後なのだ。こうなったら文句を言わず、今日一日は徹のためにやってやろう。

玄関に行き、革靴を見つけ出すのちよつと手間取った啓史は、腕時計で時間を確かめつつ外に出た。

「あら」

啓史は内心舌打ちした。ちょうど玄関前を、母親がほうきで掃いていたのだ。

「どうしたの？ 今日、何かあるの？」

「ああ。まあね」

「そうなの？」

戸惑った顔の母親は、それ以上の答えを視線で啓史に求めてくる。

「就職活動……とかじゃないわよね？」

「俺だってスーツを着ることぐらいあるさ。時間がないんだ、出かけるよ」

啓史は矢継ぎ早に言うど、母の返事を待たずに車に乗り込んだ。だが、このまま出かけてしまっても母に悪いような気がして、窓を開けて手を上げる。

「いつてくる」

「……いつてらっしゃい」

今夜夕食時に、バレるかもしれない……別にバレても構わないのだが……なんとなくバレてほしくなかった。中学校の卒業式に、まるで関係のない者が出席するというのは、やはりおかしな話だと思う。たとえば、卒業生の担任である徹に頼まれたのだとしても……

中学校の校門前の道路には、駐車場へと向かう車の列ができていた。門の前には正装した教師らしき男女がいて、中に入ってくるひとや車に向かって丁寧な頭を下げている。

門の前にある、卒業式という文字が書かれた立て看板を目にし、啓史は気後れを感じた。いつもと違う厳かで特別な空気あたり一帯に漂っている。

腕章をつけた誘導係の指示で車を停めた啓史は、降りるのをためらった。外は、ほとんどが母親だろう女性たちだ。ちらほらと祖父母や父親らしき姿もあるが……

とても父親には見えない若い啓史が会場に向かったら、少なくとも好奇心の目を向けられるに違いない。それとも、卒業生の兄だとも思ってくれるだろうか？

まったく、徹ときたら常識が足りなくないか？ いくら教え子たちの写真が欲しいから……啓史は車のシートを倒し、寝転がった。このまま式が終わるのを待ち、校門あたりで頼まれた写真を撮ればいいだろう。

頭の中がっかりした徹の姿が浮かび、胸がもやもやする。

くそっ！

五分ほどやり過ぎしたが、結局、啓史は妄想の中の徹に向かって罵声ほせを浴びせ、いきり立ちながら車から降りた。

体育館の方向を見てため息をつき、歩き出した啓史は、ふと自分の近くを歩く人物に気づいて目を向けた。

初老の紳士だった。啓史と同じようにシックなスーツを着込んでいる。紳士は何気なく振り向き、啓史に親しげな笑みを向けた。彼も紳士に向かって頭を下げる。

「君も式に？」

「はい」

「ならば早く行かないと、始まってしまっぞ」

急かすように言われ、啓史は自然と紳士と肩を並べて歩いていた。

「卒業生にお孫さんでも？」

さすがに息子や娘ではないだろうと、啓史は確信を持って尋ねた。

「いや」

予想が外れて少し慌てる。

「教師に知り合いがいてね」

「そうなんですか？」

紳士は柔らかに微笑み、頷いた。

「教え子なんだよ」

「学校の先生を……？もしかしてこの中学の？」

「いや、私は高校の教師だった」

「だったということは、すでに教職から退いたということだろう。」

「そうですか」

「担任を務めた最後の生徒だね。いまでも連絡をくれる。私を恩師とってくれてくれるらしい」

「そう口にする紳士の笑みはしあわせそうだった。啓史もつられて微笑む。」

「そうなんですか」

「私を見て、教師になろうと思ったと言っただよ。嬉しくてね」

「それはそうでしょうね」

「うむ。教師という職は、大変だが面白みがある。やりがいも」

「そう思います」

「そう言った啓史に、紳士が視線を合わせてきた。」

「もしかして君も……」

「なんですか？」

「いや、教師になる予定なんじゃないかと思ってね」

「返す言葉に悩み、啓史は口ごもった。」

「迷いがあるとみたが？ そうじゃないのかな？」

数秒考え込み、彼は頷いた。

「……ええ。迷っているのかもしれない」

「そうか」

ふたりは体育館の入り口までやってきていた。スリッパを受け取り、啓史は手渡されたビニール袋に靴を入れる。そして、その袋を片手に提げ、受付をしている紳士を待った。

「すまない、待たせたね」

紳士もまた、当然のように啓史に歩み寄ってきて言う。

少々おかしかった。この紳士とは、先ほど会ったばかりだというのに……

ふたりは一緒に、会場に入った。

会場の入り口には、正装した教師がふたり、頭を下げながら父兄を迎え入れていた。

卒業式の独特な雰囲気、会場一帯を包み込んでいる。自分が部外者だと知っている啓史は、ずいぶんと落ち着かない気分を味わった。隣にいる元高校教師だという紳士は、こういう場に慣れていないらしく、まるで動じていない。ふたりは父兄席の後ろのほうに座り込んだ。席を選んだのは紳士だ。彼は啓史に一番端の椅子を勧め、自分はその隣に座り込んだ。

「ここはいい席なんだ」

啓史は頷いた。中央の位置だからと言いたいのだろう。

在校生は既に着席していたが、卒業生が入場してくるまで、まだ十分ほどあった。啓史は受付を

通らなかつたから、何ももらわなかつたのだが、紳士は卒業式の式次第を書いた用紙を差し出した。きた。

「もらつていいんですか？」

「ああ、君のぶんもついでにもらつたんだよ」

別に必要なかつたのだが、啓史はありがたく受け取った。

「教師というのは、いい仕事でしたか？」

「君は、なんの教師を目指しているのかね？」

「理科です」

「ほお。理科はいいよ。生徒たちの興味を引きやすい」

「興味を？」

「うむ。学問を教えるコツは、生徒の興味を引き、好奇心を掻き立てることだ」

「わかる気がします」

「教科書をなぞるような授業などしてはいけない。自分が面白いと思う授業をすればいい。簡単なことさ」

「簡単でしょうか？」

「ああ。簡単さ」

紳士は何を思い出したのか、おかしそうに笑った。

「偉そうに言っているが、私は教師になつて数年、ろくでもない教師だつた」

啓史は頷くこともできずに、無言で紳士を見つめた。だが、紳士はそれ以上言葉を紡ぐことはなかつた。

スピーカーが、卒業生の入場を知らせる。啓史は無意識に背筋を伸ばし、襟えりを正した。

卒業式らしい音楽、そして迎える拍手……。もちろん啓史も拍手に加わつた。紳士も軽く手を叩いて卒業生を迎えた。

卒業生の列は、啓史のすぐ脇の通路を通つて行進していった。

紳士がこの席はいい席だと言つたのは、このことかもしれない。

一組、二組と列が進み、三組の列が進んできた。三組の先頭に徹がいた。脇を通りすぎていった兄の背中を、啓史は見つめた。徹とほぼ背丈が変わらない男子生徒がすぐ後ろにいて、そのあと男女混合の列が続く。啓史はちびすけの姿がないかと気にしていたのだが、結局、見つけれないうちに、次のクラスが入ってきてしまった。四組の担任と生徒の列が続くのを見ながら、啓史は首を捻つた。おかしい。三組にいるはずなのだが……

卒業生が着席し、厳かに式が始まった。

ちびすけの名前は、なんだつただろう？

ちびすけ呼ばわりしていたせいで、徹に名前を聞いたのに覚えていない。徹はエノチビと言つていた。ということは、苗字にエノがつくということだ。生徒の列はたぶん出席番号順だろうから、ちびすけは、徹からそんなに離れていなかったはず……

啓史が考えている間にも、式は進んでいった。

卒業証書の授与が始まった。名を呼ばれて生徒たちが順番に起立してゆく。時折、カメラのフラッシュが光る中、三組の番になった。体育館の隅々にまで、徹の声が響く。

啓史の隣の紳士が、先ほどの用紙を眺めているのに気づき、啓史は眉を上げた。卒業生の名が書いてあるようだ。彼は手にしていた用紙を開き、三組の名を上から順に辿った。

エノ……エノ……榎原……これだ……

そのとき、徹が「榎原沙帆子」と、名を読み上げた。

姿は見えなかったが、緊張を含んだ硬い声で「はい」という控えめな返事が聞こえた。

ちびすけだ……なんだ、ちゃんとしたのか……

安堵を感じた啓史は、知らず笑みを浮かべていた。

卒業生全員での合唱は、とても感動的なものだった。曲目も良かったが、生徒たちの歌声は、卒業式ということもあってか、ひどく心を動かす響きを持っていた。啓史の周囲でも、父兄たちのすすり泣き上がる。

「教師になって良かったと感じる一瞬だな」

紳士が独り言のように口にした言葉が、啓史の心を揺り動かした。その揺れははじめとても小さかったが、徐々に大きくなっていった。

不可解な感情に気をとられ、自分の役割を忘れていた啓史は、ハッとしてポケットからデジカメを取り出し、レンズを正面に向けた。ちびすけはどれだけ探しても、見つけれない。

啓史はもどかしさを感じつつ、ステージの中央あたりにカメラを向け、シャッターを幾度となく切った。

8 愚かな質問

式が終わり、拍手とともに、卒業生の退場が始まった。

啓史は退場する際の徹を写してやろうと、デジカメを構えて待った。

二組が通りすぎてゆき、少し間隔をあけて徹の姿が現れた。デジカメの中にいる徹は、強張った表情をしていた。啓史はファインダー越しに兄を見つめ、シャッターを切る。二度目のシャッターを切ろうとしたとき、デジカメの小さな四角い画面の中にいる徹が、視線を啓史の隣に向け、意表をつかれたような顔をした。啓史はその表情に驚き、思わずシャッターを切った。

「やあ」

その声は、啓史の左隣にいる紳士の口から出たものだった。画面の中の徹の唇が開く。「先生」という声が微かに聞こえた。ハッとした啓史は、急いでデジカメを下ろしたが、徹はすでに歩き去っていた。啓史は真横に向き、驚きを込めて紳士を見つめた。

「いまのが、そうなんだ」

啓史は頷いた。そうだったのか……。この紳士を恩師と呼び、慕っていたのは徹だったのだ。そ

して、この紳士は、徹に教師になることを決意させた人物。

「頭が良すぎるのが、いささか難点だった」

冗談めかしたその言葉に、啓史は小さく吹き出した。だが、その言葉には真実も含まれている。頭の良すぎる教師というのは、勉強が得意な者のことを理解できないものだ。啓史が教えを受けた教師の中にも、そういう者がいた。

もちろんこの紳士は、徹がそういう部類の教師だとは思っていないだろう。

「だが、ひとの心の機微をとでも良く理解する生徒だった」

そのとおりだ。内緒にしておきたいことを、やすやすと見抜いてしまう兄は、弟にとって、かなりやっかいな存在だ。

「彼は良い教師になるだろう」

啓史は無言のまま頷いた。

まだ続いている卒業生たちの列に、啓史は目を向けた。まっすぐ前だけを見つめている生徒。赤らんだ顔を隠すようにハンカチで覆っている生徒。笑いながら歩いてゆく生徒……

中学を卒業し、彼らはこれから新たな世界で生きてゆくのだ。

全員が退場すると、拍手も終わり、会場に静けさが広がった。来賓たちが退場したあと、在校生が各通路から退場し、体育館の椅子の半分以上が空になった。残るは父兄と教師陣だけだ。もうこの場に残る必要もない。啓史は隣の紳士に顔を向けた。

「それでは、これで」

「もう帰るのかね」

「いえ、少し頼まれ仕事が残っているんですよ」

「そうか。それでは私も行くかな」

紳士が立ち上がるのを見て、啓史も立ち上がった。父兄の前ではマイクを持った教師がこれからの流れを説明している。みな熱心に聞いていて、去ってゆくふたりを気にとめる者はなかった。

体育館の入り口まで来て、紳士が振り返った。

「私はちよつと挨拶に行ねばならないんだ。これで失礼するよ」

「そうですか」

頭を軽く下げる紳士に、啓史も頭を下げた。

「あの」

ゆっくりとした動きで踵かかとを返そうとした紳士を、啓史は思わず呼び止めていた。

紳士が、何かな？ という問いの表情を向けてくる。

「いえ……」

啓史は口ごもった。質問は胸にあるが……この質問をすること自体が、愚かなことに思えてならない。だが、この紳士に聞いてみたくなかった。いま聞かなければ後悔するだろうという思いに駆られて、啓史はためらいつつも口を開いた。

「私は……就きたい仕事があつて……ですが、それは教師ではないんです」

「そうか」

啓史はいったん口を閉じ、口にしづらいことを言葉にする気力を掻き集めた。

「一生の仕事とするつもりがない者が、教師を経験してみたいという思いから、教師になるというのは間違いでしょうか？」

紳士は、それまでとは打って変わって、難しい顔になった。その瞬間、啓史はその質問を口にしたことを悔いた。紳士の表情ははっきりと、それは間違いだと言っているように思えた。

「こんな質問をしまして、すみませんでした」

啓史は紳士に向かって深々と頭を下げ、踵を返した。

「君」

二歩歩いたところで、戸惑ったように呼び止められる。啓史はもう一度紳士を振り返り、軽く頭を下げて、その場を去った。

外に出た啓史は、ため息をついた。やはり、彼は教師にはなれない。

閑散としていた校門前に、ひとがぞろぞろと出てきた。時間が経つにつれて人数は増してゆき、十分もすると、あたりは生徒と父兄らで埋めつくされた。そのうち、それぞれが集まり、クラスの数だけ、はっきりとした固まりとなっていく。その中心にいるのは、もちろんそれぞれの担任だ。頭を下げたり会話をしたり写真を撮ったりし、時折賑やかな笑いがどつと沸く。啓史は遠目に徹の姿を確認し、その輪に少し近づいた。

男子学生たちと小突き合い、楽しげに笑っている姿や、母親と生徒に挟まれて写真に収まる姿を、

啓史はこれでもかというほどデジカメのメモリに収めた。あとで文句を言わせないために、徹がうんざりするほどの枚数を撮って帰るつもりだ。どこか自棄やけになっている自分がいることに、啓史は気づかないふりをした。徹の姿に、羨望せんぼうを感じる自分にも……

啓史に気づいていないのか、いまはそんな余裕もないのか、徹はこちらに視線を向けてはこなかった。

写真を撮っているうちに、啓史は、徹を囲む輪の外を、行ったり来たりしている女子生徒に気づいた。徹の側に行きたいが、強引に割り込むこともできずに困っている様子だ。固まりの中心にいる徹を見ようと必死なのか、右に行つては中心を覗き込もうとジャンプをし、左に行つては、またびよんびよんと跳ねている。その様は愛らしいけれど、滑稽こっけいだった。わだかまりが押しやられ、笑いが込み上げた。

くすくす笑いながらその女子生徒を眺めていた彼は、ちびすけのことを思い出した。

そういえば……ちびすけのやつはどこにいるんだ？

あの固まりの中に埋もれているのかもしれない。ちびだから……

啓史は、記憶にあるちびすけの姿を思い出しながら、徹を囲んでいる人々を確認していった。中三だというのに、小学生みたいな細っこいチビなど、そうはいないから目立つはずなのだが……

啓史は首を捻った。やはり、どうしても見つけられない。この中にはいないのだろうか？ 担任との最後の別れなのに、まさかも帰ったのだろうか？

確かに、少数だが、すでに帰途につこうとしている者もいる。

ちびすけを見られなかったことは残念だったが、いないものは仕方がない。啓史はまたデジカメを輪に向けて構えた。先ほどのぴよんぴよん跳ねていた女子生徒が、フアインダー越しにくるりと振り向き、彼の方へ向かってきた。少し俯き加減だが、望遠にしてあるから、表情がはっきりと認める。

啓史は眉をひそめた。

ちび……すけ？

ずいぶん雰囲気が違う。だが、どうやらそのようだった。

まず髪の長さが違う。……ショートカットだった髪が、肩に触れるほど長くなっていた。

こいつ……小学生並みだったのに、やたら育ってないか……？

あれから、まだ四ヶ月……経ってないかな？

なんだかムカついた。騙された気分というか……

チビはチビのままでもいいのだ。なのに……

ただのちびすけだったはずの彼女は、スーツを着た男性に目をやると、少し顔をしかめながら歩み寄っていく。その男性は、ちびすけに向けてデジカメを構えていた。彼女の家族……たぶん父親なのだろう。ふたりは会話をし、校舎のほうを振り向いたりしていたが、そのうち男性のほうで、誰かに向かつて手を上げた。啓史はつられるようにそちらに目を向けていた。

上げられた手に応えるように手を上げた女性が、ふたりに向かって笑顔で駆け寄ってきた。

それから家族で写真を撮り合い、ちびすけも友達と並んで写真を撮ったりしていた。その様子を、

啓史は自分も徹の写真を撮りながら目の端に入れていた。そのうちちびすけを含めたグループは、クラスの輪の中に入り込み、今度は徹と一緒に写真を撮り始めた。頭を下げ合う徹と親たち、そして賑やかな会話が続く。そんな中、啓史は少なくとも数の好奇の目が、自分に向けられていることに気づいた。居心地が悪くなった啓史は、その場から退散することにした。

写真も充分すぎるほど撮ったことだし……もういいだろう。

デジカメをポケットに落とし、啓史は駐車場へ向かった。

自分の車の側に付んでいる男性を目にして、啓史は驚いた。先ほどの紳士ではないか。

「やあ」

「どうしたんですか？」

「君を待っていたんだ」

「私を？」

「どうして？ という意味を込めて、啓史は言った。

「答えが宙に浮いたままになってしまったから、気になってね」

「あ……ああ。ですが……」

「忙しいのかな？ 時間がなければ、無理には引き止めないが……」

「いえ。時間はありますが……」

「それなら、中庭にでも行って、座って話さないかね」

提案するように言われ、啓史は戸惑いながらも頷いた。

啓史は紳士と肩を並べ、またひとだかりの中へと入り込んだ。歩きながら、徹のいる方向に顔を向ける。彼の目に、ちびすけの姿が飛び込んできた。いままで彼の中のちびすけは、ただのチビだった。なのに、いまは……

啓史とは交わらない世界で、ちびすけは姿を変えてゆくのだ。これからも……
もう逢うこともない。……ちびすけが卒業してしまえば、なんの接点もなくなる。
徹に笑いかけているちびすけの横顔を、啓史は無表情で見つめた。
どうしてか……胸に痛みが走った。

9 理不尽な苛立ち

「いい場所ですね。こんな場所をよくご存知ですね」

校舎と花壇と木立のある風景を眺めながら、啓史は言った。校舎のほうが高い位置にあるので室内はあまり見えないのだが、そこが図書室だということはわかる。

「幾度も来ているからね。私はどこでも散策してみるのが好きなんだよ」

図書室の側に置いてある木のベンチに座り込んだ紳士は、啓史にも座るように勧めてきた。彼は頭を下げて、紳士の隣に腰を下ろした。

「どうして、答えを聞かずに行ってしまったのかね？」

その質問に啓史は顔をしかめた。

「答えを……：…いただいたと思っただんです」

「ほお？」

かなりバツが悪かった。

「私はなんと答えたのか聞いていいかね？」

その問いかけに、啓史は顔が赤らむのを感じた。

「教師になるべきではないと……」

「ふむ」

紳士は顎を撫でて考え込んだ。

「容易には答えられないと思っただ。あの問いの答えは……君の将来を左右するように思えてね」

啓史は紳士の目を見つめ、頷いた。

「そのとおりです」

紳士が笑みを見せた。

「やはりそうだったか」

「すみません」

啓史は思わず謝罪していた。紳士が声を上げて笑う。

相手は初対面のひとだというのに……俺ときたら、なんて重い問いを向けてしまったのだろう。

徹の恩師だったから？ 徹の将来に影響を与えたひとだったから？

「君には就きたい仕事があるんだったね？」

「はい」

「だが、教師も経験してみたい？」

啓史はなかなか返事ができなかった。

「……はい」

「就きたい仕事ははつきりとしていて……なのに、強い迷いがある」

「そうです」

「それが答えじゃないかね？」

「えっ？」

「迷いの強さだよ。君は教師になりたいんだろう」

その言葉は問いかけではなかった。

「……ですが……」

「教師という職は奥が深い。経験を積むことで見えてくるものもある」

前を向いたまま紳士は語り、「だがね」と言葉を添えて啓史を見つめた。

「何年やろうとも学び終えることはない。そういうことだよ。何年教職に就くつもりか知らないが、君はその年数分の経験を積むだろう。それでいいんじゃないかと思うね」

「そうでしょうか？ ……それでは無責任ではないでしょうか？」

紳士は小さな笑い声を上げた。

「無責任なことになるかどうかは、君次第だろう」

啓史の目を、紳士は笑みをたたえた目で、まっすぐに見返してきた。

「無責任なことをしなければいい」

心が波立った。

「やるだけのことをやってみたらいい。そういう姿勢でことにあたる人物を、私は無責任だとは思わないよ」

紳士が立ち上がった。啓史は顔を上げて紳士を見つめる。

「私は教師しかしてこなかった。教師という職しか知らない。もちろんそれを後悔していないし、良かったと思っている。だが同時に……違う人生を歩んでみたかっただとも思う」

悪戯いたづらっぽい笑みを一瞬見せた紳士は、表情を改めた。

「役に立てたかはわからないが……」

紳士が立ち去ろうとする気配に気づき、啓史は急いで立ち上がった。

「ありがとうございました」

深々と頭を下げる。

「いや、それじゃ」

去ってゆく紳士の背に、啓史はもう一度頭を下げた。

紳士の姿が見えなくなると、彼は再びベンチに座り、思いを沈み込んだ。

どれだけそこに座り込んでいただろうか。ふいに背後で物音がし、啓史は後ろを向いた。図書室の中に誰か入ってきたらしい。啓史は関心をなくして顔を戻した。

「助かったよ。図書室の本借りっぱなしで卒業したら、やっぱ気分よくねえもんな」

はつきりとした声が窓越しに聞こえた。

「ほら、本出せよ」

「おう」

その場から立ち去ろうかとも思ったが、彼はためらいの末、そのままだった。いま立ち上がったら、中にいる者たちを驚かせてしまうかもしれない。

「ありがとな」

「ああ」

「それじゃ行こうぜ」

「俺は用事があるから、先に行っててくれ」

「用事？」

「あ、ああ……まだ来るやつがいてな。待つてなきゃなんない」

「なんだ、本を返しそこねてたの、俺だけじゃなかったのかよお」

ホッとしたような言葉のあと、「じゃあ、またあとでな」という声が聞こえ、静かになった。

啓史は後ろを振り返ってみた。図書室の中にいる生徒を見て、彼はいくぶん驚いた。知っている顔だったのだ。とはいっても、相手は啓史を知らないが……

写真を指して徹が教えてくれた、バレー部の主将。たぶんそうだろうと思う。徹がずいぶんと褒めていた生徒だ。統率力があり、思いやりがあり、同級生には頼りにされ、下級生には慕われていると……名前は……なんだっただろう？

男子生徒は携帯を見ていたが、パチンとそれを閉じると、啓史に背を向けて椅子に腰かけた。声をかけてみようか？

相手を驚かせるかもしれないが、担任の弟だと名乗れば会話もスムーズにいくかもしれない。

面白い話が聞けそうな気がしてきて、啓史は立ち上がった。

「どうせ断られるぞ、どうする？」

あまり温度を感じさせない淡々とした声に、啓史は眉を寄せた。

断られる？

話しかける相手など部屋にはいないし、電話をかけているわけでもない。どうやら独り言だったようだが……

前屈みになって両手で顔を覆ってしまった相手を見て、啓史は気をそがれた。何か気に病むことでもあるらしい。さすがにこの状況では話しかけられない。啓史は、学生服の背中を見つめた。

青いな……

その青さを羨ましく思っている自分に気づいて、啓史は苦笑いを浮かべた。

窓の向こうにいる相手の心情に付き合うように、啓史はベンチに座って足を組み、空を見上げた。

春なんだな……。もう少ししたら、桜も咲くだろうし……

今年は四年だ。授業は減るが、卒業論文がある。大学の研究と、会社の研究室……

教員資格は……まだどうするか決められないが……

紳士からもらった言葉を、啓史はじつくりと思い返した。

……取るだけ、取っておくか……

そう考えた途端、未来が明るくなった気がして、啓史はそんな自分を笑った。

校舎の向こう側からは、ざわざわとした人声が聞こえてくる。啓史は青空を見つめていた視線を宙で泳がせた。

いま思い返すと、ちびすけはそれほど変わっていないかのような気がする。髪が伸びていたために、少々大人びて見えただけなんじゃないだろうか……

啓史は納得した。そうだよな。数ヶ月程度で、そんなに変わるわけがない。背だって、そんなに高くなってたわけじゃない。

ポケットに手を突っ込み、啓史はデジカメを取り出した。退場する徹の写真を確認し、次の画像を開く。さらに次に進もうとした啓史の指が止まった。恩師を発見し、驚きを顔に貼り付けている徹の後方に、ちびすけが写っていた。誰を見ているのか、斜め横あたりに顔を向けている。

啓史はちびすけをじつと見つめた。はつきりとした変化がそこにはあった。

「や、やあ」

いきなり喉を詰まらせたような緊張した声が聞こえ、啓史はぎよつとして後ろを振り返った。

呼びかけられたと思ったのだが、啓史に対する呼びかけではなかったようだ。図書室の本を返却

するという人物がやってきたのだろう。

啓史は、新たに現れた人物を認めた瞬間、呼吸を忘れた。

ちびすけ……？　なんでこいつが……

咄嗟とつさに身をひそめた。こんなところにいるのを知られたくない。姿を見られたらバツが悪すぎる。

「えっと……あの……」

ちびすけの声……か？

「ごめん。呼び出して」

「ううん」

「もう……わかるよな？」

苦笑混じりなのに、啓史はその言葉に、重い響きを感じた。

ちびすけは返事をしなかった。

このシチュエーションは……まず間違いなく……

啓史はさつさとこの場から離れなかった自分に腹が立った。

「俺……俺……」

啓史は考えるより先に行動していた。さつと立ち上がった彼は、振り返りもせずその場をあとにした。ふたりに気づかれたかもしれないが、どうでもいい。

やってられっか……

むなくそが悪かった。胸のややもやが、種類を変えて舞い戻っていた。

小学生の雰囲気脱ぎ捨てていたちびすけに、怒りが湧いてならない。なんでチビのままでないんだ！ そんな理不尽な考えが湧き上がり、啓史は手にしているデジカメを、破壊しそうなほど握り締めた。

10 先輩教師の忠告

車を停めた啓史は、外に降り立ち、周囲をゆっくりと見回した。伯父の経営する龍華^{りゅうか}高校。子どもたちのころはこのあたりを遊び場に見慣れた光景のはずなのだが、まるで初めて訪れたような気になる。校門から入ることなんて、なかったからなのかもしれない。教育実習生として、ここにやってくることになるなんて……

感慨に浸りながら、啓史は教員専用の昇降口に向かった。

職員室の中に入ってきた啓史の姿に気づいて、ひとりの教諭が足早に近づいてくる。

「啓史君、来たね」

子どもの頃から知っている、この高校の化学教諭、荻野^{おぎの}だ。荻野の笑みを目にして、緊張が緩んでゆく。

「よろしくお願いします」

「待ちかねたよ。君が……ああ、そうだな。まだ時間も早いし、いったん場所を変えようか」

周囲から強い興味の目が向けられているのを感じながら、啓史は荻野について職員室を出た。

廊下を歩く間も、生徒たちの好奇の目が彼を追う。

「最後に君が来たのはいつだったかな？」

化学準備室の前に来て荻野が言った。

「それほど前では……大学に進んでからは来てませんでした……三年ぶり……かな」

ドアノブに手をかけた荻野は啓史を見つめ、何を思い返しているのか懐かしそうに目を細めた。

「そんなもんかな？」

「ええ」

廊下を眺めながら返事をした啓史は、荻野に続いて部屋の中に入った。

「本当に辞めるんですか？ ……寂しくはありませんか？」

啓史のその問いに答える前に、荻野はソファを勧めてくれた。啓史が座ると、荻野は机の前の椅子を転がしてきて腰を下ろす。

「もちろん寂しいな」

「それでもですか？」

「ああ。そうするしかない」

「何年、教職を？」

啓史はまだまだ若い荻野の顔を見つめて尋ねた。

「九年だな。本当はこの春に退職しているはずだった。それが一年ずれ込んだ。何か飲むかい？」